

令和6年度

病害虫発生予察情報 第2号

注意報第1号

北海道病害虫防除所 令和6年(2024年)4月11日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

トマトの育苗中からトマトキバガ発生に注意！ 葉の食害を認めたら速やかに防除を！

前年、全道各地でトマトキバガの飛来を認めており、一部地域では施設栽培トマトでの発生も確認されました。冬期間も展張していたハウス内で越冬している可能性があることから、施設栽培トマトでは春から注意が必要です。また、本年も早い時期から飛来する可能性があるため、前年発生が認められていなかった地域でも今後の発生に注意してください。

本種は増殖性が高い害虫です。育苗中からハウス内の観察に努め、葉に特徴的な被害（写真1参照）を認めた場合、速やかに薬剤防除を開始してください。また、すでに発生が認められている地域では、育苗中からの防除を速やかに行うとともに移植時に灌注剤や粒剤による防除を行ってください。

1. 発生地域 全道

2. 発生期 早

3. 発生量 -

4. 注意報発令の根拠

- (1) 前年、本種の発生が認められた地域の越冬ハウスでは、既に育苗期間中から葉の食害が確認されており、ハウス内では成虫も捕獲されている。
- (2) 前年、フェロモントラップによる調査において全道各地で成虫の飛来を認めている。本年も早い時期から全道的に飛来する可能性がある。

5. 防除対策

- (1) ほ場を観察し被害の確認に努める。幼虫は数～5 mm程度と小さく、葉や果実に穿孔侵入する。葉の被害の特徴は、薄皮を残した大ぶりの袋状潜葉痕となり、糞が端に蓄積される（写真1参照）。また、幼虫は潜葉痕から脱出後に生長点付近を加害する。
- (2) トマトキバガの発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター、農業試験場、病害虫防除所に連絡し、発生種の確認を行う。
- (3) 育苗期間中に被害が確認された施設及びその近隣地域では、灌注剤や粒剤の苗施用を行い、早期からの増殖を防止する対策が有効である。
- (4) 定植後は薬剤散布を行う。薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う（表参照）。
- (5) 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋没するなどして死滅させ、適切に処分する。



写真1：トマト葉の食痕



写真2：トマト果実の食害痕



写真3：ほ場で確認された幼虫（メモリは1mm）



写真4：トマトキバガ成虫

写真はいずれも道南農業試験場 原図

表 トマトキバガに登録のある薬剤(令和6年4月8日現在)

農薬の種類	農薬の名称	登録作物		使用方法 (希釈倍数、使用方法)	IRAC コード
		トマト	ミニトマト		
B T 水和剤	エスマルク D F	○	○	1000倍、散布	11A
アバメクチン乳剤	アグリメック	○		500～1000倍、散布	6
インドキサカルブ水和剤	トルネードエース D F	○		2000倍、散布	22A
エマメクチン安息香酸塩乳剤	アフアーム乳剤	○	○	2000倍、散布	6
クロルフェナビル水和剤	コテツフロアブル	○	○	2000倍、散布	13
シアントラニリプロール水和剤	ベネビア O D	○	○	2000倍、散布	28
	ベリマーク S C	○	○	400株当り25ml、灌注、 希釈水量400株当り 10～20L（1株当り 25～50ml）、育苗期後半～ 定植当日	
シアントラニリプロール粒剤	ブリロッソ粒剤	○	○	2g/株、株元散布、	
	ブリロッソ粒剤オメガ	○	○	育苗期後半～定植時	
スピネトラム水和剤	ディアナ S C	○	○	2500～5000倍、散布	5
	ラディアント S C	○	○	2500～5000倍	
テトラニリプロール水和剤	ヨーバルフロアブル	○	○	2500倍、散布	28
ピリダリル水和剤	プレオフロアブル	○	○	1000倍、散布	UN
フルキサメタミド乳剤	グレーシア乳剤	○	○	2000倍、散布	30
フルベンジアミド水和剤	フェニックス顆粒水和剤	○	○	2000倍、散布	28
メタフルミゾン水和剤	アクセルフロアブル	○	○	1000倍、散布	22B
脂肪酸グリセリド・スピノサド水和剤	ダブルシューター S E	○	○	1000倍、散布	-,5